

民とは一(の)如くで世界に類のない団体であるが、日本國家を、より良く治めて行く上には憲法を制定してゐる。親子、夫婦の間でも争ひが起れば、その善悪を決めて裁きをしてやるために民法が作られてゐる。

労働者を保護、救済する法律を作り、資本家と労働者の間に争ひが起つた場合に、法律に依つて正しくその争ひ裁き、産業の平和と發達を圖る政府の方針が何故に悪いのか。資本家が反對する眞實の腹は、労働者の目を覆ひ、口をふさいで永久に辛の様に従順にさせて、まるでゴマの油でも搾り取るように搾れるだけ搾つたら、何時でも退職手當や解職手當を出さずに(出すとしても)出来るだけ勤(く)して資本家の我儘、勝手に労働者の餓首(がく)が出来るようにするためである。

昨今の軍需インフレの好景氣で資本家は大儲をして無茶な利益配當をやつてゐる。資本家の多くはこの儲を資本の消却や、事業の擴張費や豫備費、研究費等には一文も残さず、軍需景氣の次に來る不況の大嵐に備へる何等の用意をすることなく、只だ火事場泥棒の様な考(が)で高配當をやつてゐる。

軍需インフレの景氣で資本家は大儲けをしてゐるが労働者の賃金は少しも昇つてはゐない。只だ労働者の月々の収入は多少増つてゐるようであるがこれは残業や夜業やその他請負などの労働が激しくなつた結果で、つまり労働者が余計に働いたための収入増加である。労働賃金は上らない上に世の中は軍需景氣に煽られて物價が高くなり、労働者は軍需インフレの恩恵を受けるどころか却つて軍需景氣のために苦しめられてゐる。

資本家は今の軍需景氣が永續(と)せず、近くこの景氣がすたれ、その反動に、深刻な不景氣が來ることをよく知つてゐる。それで軍需景氣で多くの労働者が入用でも、殆ど臨時工許りを備入れてゐる。臨時工は本工と同じ技術と同じ能率をもつて、本工と同じ重仕

してゐるにもか、()解退職手當も貰らねば亦本工が受けてゐる福利、共済も受けてゐない。

何故に、資本家は常備()で本工とすべきものを臨時工や人夫()に使つてゐるのか。それは近く不景氣に陥つて労働者の餓首をする時、臨時工や人夫()は、文の解職手當や退職手當を出さずに追ひ出すことが出来ると言ふ極めて愚()な計()を考へてゐるのだ。この事は獨り臨時工や人夫()だけの不幸、不幸ではない。本家は臨時工や人夫()を使つて仕事に馴れさせておいて、事業縮小や多數解雇()をする場合に、給料の高()本工や年老いた常備工()を餓首()賃金の安い臨時工()や人夫()と入れ變()をやる()とする愚()な計()を持つてゐるのである。

この問題は常備工、本工の諸君、眞剣()に考へて置かねばならぬ。臨時工も本工もお互()に自分自身のこと良く考へて、そうした場合に、行き當つても迷はずに、どうしたら良いかと言ふ自分自身の生活を守る準備と用意を今から整えておかねばならぬ。

賃金値下、餓首()が起つてから發()起()して廻つても無駄である。「轉ばぬ先の杖」と言ふ諺()があるが今の間に、労働組合に加入し、労働組合を組織しておかねばならぬ。労働者が労働組合に加入してゐるのは他人()のことではなく、お互()が自分自身の身を守り、自分の職()を守る()ことである。

健全な労働組合は今日では、もう危険なものでも不安なものでもないことが明白()にされてゐる。労働者は労働組合を作つてその生活を守らねば、他に方法がないので、政府でも何とかして労働組合法()を作り労働者を團結()させその生活を保護して、それを發()達()させようとしてゐる。政府が労働者の爲()になる()なら、な法律を作つたり、或は労働者が労働組合を作つたりするのを資本家が猛烈()に反對してこれを壓迫()するのは、國家、國民()のことは少し